

称号及び氏名	博士（言語文化学）	森田 美里
学位授与の日付	2018年9月25日	
論文名	フランス語の話し言葉における舌打ち音—言語学および日仏異文化間コミュニケーションの観点から—	
論文審査委員	主査	高垣 由美
	副査	山東 功
	副査	西尾 純二
	副査	Gabriel Bergounioux（オルレアン大学教授）
	副査	前川 喜久雄（国立国語研究所教授）
	副査	Laurence Labrune（ボルドー・モンテーニュ大学教授）

## 論文要旨

### 1. 研究の背景と目的

本研究は、これまでほとんど研究されてこなかった、フランス語母語話者の談話に頻繁に現れる「舌打ち音」に焦点を当てたものである。これまで舌打ちが等閑視されてきた背景には、単なる個人の悪癖や雑音としか捉えられてこなかったからと考えられる。日本社会での舌打ちという行為は通常、不満の表明であるため、日本語母語話者の中にはその音を耳にするだけで不快に感じる者もいる。よって、日仏コミュニケーションにおいて、この音が阻害要因になることがある。

本研究の目的は、フランス語談話における舌打ち音に関して、体系的かつ詳細に記述すると同時に、主に言語学的観点から、またそこから発展する形で異文化間コミュニケーションの観点から考察し、その意義を明らかにすることである。

### 2. 本稿の構成

本稿の構成は以下のとおりである。

- 第1章 研究の対象・目的・方法
- 第2章 舌打ち音—先行研究およびフィルターとの関係
- 第3章 研究目的別調査

- 第4章 ESLO コーパスを用いた舌打ち音調査
- 第5章 コーパスにおける舌打ち音の出現と頻度
- 第6章 舌打ち音の用法と機能
- 第7章 フランス語話し言葉における舌打ち音とは？
- 第8章 日本人フランス語学習者と舌打ち音
- 第9章 結論

### 3. 各章の概要

第1章では、以下の4つのリサーチクエスチョンを立てた。

1. フランス語における舌打ち音の生起環境はどのようなものか。
2. フランス語の舌打ち音は個人的な癖なのか、一般的なものなのか。
3. フランス語の舌打ち音の用法、機能は何なのか。
4. 舌打ち音の認知が人によって異なるのはなぜなのか。

第2章では、日本語、フランス語、その他の言語における舌打ち音研究を概観した。その結果、日本語の「舌打ち」と同等の語がフランス語にはないこと、談話における舌打ち音に関して英語においては若干の研究がなされているが、フランス語では十分な研究がなされていないことを明らかにした。また、さまざまな定義のある日本語およびフランス語のフィラーに関する先行研究も概観し、本研究におけるフィラーの定義を示した。

第3章では、調査Ⅰ～Ⅳの4つの調査を行った。

調査Ⅰのストーリーテリング調査では、フランス人日本語学習者の日本語と母語であるフランス語に舌打ち音がシステムティックに現れることを確認した。また、日本語母語話者の日本語談話では、舌打ち音の生起位置が、フィラーを発する位置と一致するため、個人の単なる悪癖ではなく、フィラーのような役割を持っている可能性を指摘した。

調査Ⅱの地下鉄での行き案内ロールプレイ調査では、話し手の持っている情報量と、舌打ち音を発するかどうか深く関わっていることを確認した。基本的に無意識に発せられ、聞き手にも聞き流されているが、こちらが指摘すると認知できることが明らかになり、フランス語母語話者からは、「この音は普段から発している」という内省も得られた。また、日仏バイリンガルの調査対象者からは、日本語では舌打ち音を発する代わりに、「えーと」「そうだなあ」「なんだろう」などの言葉を発しているという見解が示された。

調査Ⅲのフランスとベルギーのメディア調査では、舌打ち音がある特定の社会的条件の話者にだけ現れるわけではないこと、フランスだけでなくベルギーのフランス語母語話者の談話にも現れることが明らかになった。また、苛立ちなどの感情とは切り離されていることがわかった。

調査Ⅳの実験音声学的調査では、メディアに現れた舌打ち音と、音声の専門家から収集した吸着音データを比較することで、フランス語の談話に現れる舌打ち音の調音点を明らかにすることを試みた。円唇化した両唇吸着音、歯または歯茎を調音点とした吸着音である可能性が示唆された。

調査Ⅰ～Ⅲで得られたデータから抽出した舌打ち音を、その生起環境、聞き手による

内省という観点から分析を行い、「情報処理および言語表現処理」、「境界設定」、「発見」、「発話権の取得・保持」という用法、かつ注意喚起機能があるのではないかという仮説を立てた。

第4章では、ESLO コーパスの概要、このコーパスを用いた調査方法、使用意義、具体的な作業手順を示した上で、調査V～VIIの3つの調査を行った。

ESLO コーパスには1970年代前後のデータであるESLO1と、2008年のデータであるESLO2がある。調査Vの舌打ち音の社会言語学的調査では、ESLO2から無作為に抽出した老若男女、さまざまな社会階層のフランス語母語話者100人の談話を調べ、93人の談話に舌打ち音が現れていることを確認した。そして、舌打ち音が現れない談話の特徴として、調査IIで挙げた話者の知識の有無だけではなく、通常のスピードより遅く話す、あるいは早く話す、あまり相手とのコミュニケーションに気乗りしない、申し訳なさやためらいがないといったことが関わっている可能性を指摘した。

調査VIの舌打ち音の社会的価値と解釈に関する調査では、フランス人大学生、言語学を専門とする者を対象に、舌打ち音の含まれた談話を聞かせ、その音が認知されているのか、舌打ち音の有無によって異なる解釈が生まれるのかどうかを調査した。その結果、前者のほとんどの者が舌打ち音に気づいていないが、舌打ちがある場合には「言いよどみ」「言葉を探している」「いらだっている」という解釈できることがわかった。後者に舌打ち音に気づいていた者はいなかったが、コンテキストから判断すると、話し言葉における句読点である「ポンクチュオン」ではないかという解釈がいずれの者からも得られた。

調査VIIの舌打ち音の通時的調査は、調査IVと同様、予備調査の意味合いが強いが、ESLO1 コーパスの1969年に録音された女子大学生の談話データを調査し、5分に1回のペースで舌打ち音が現れていることを確認した。ESLO2よりも40年前のフランス語の話し言葉にも舌打ち音が現れていることがわかり、近年の話し言葉だけの特徴ではないことを示唆した。

第5章では、ESLO2 コーパスを用い、モノログデータとして講演（約3時間）、ダイアログデータとして若者へのインタビュー（約6時間）の舌打ち音の生起環境を比較する調査をした。その結果、モノログ、ダイアログに関係なく、*euh*, *hm* というフィラーや *alors*, *et*, *mais*, *donc* との共起頻度が高く、談話や発話の区切りの部分で現れることが明らかになった。ダイアログでは質問に答える際、または同意を表す際に出現頻度が高いことがわかった。

第6章では、ESLO2 コーパスのデータから抽出した舌打ち音の生起する統語的環境、前後コンテキストを観察し、用法と機能に関して再度考察を行った。その結果、3つの機能があり、それぞれいくつかの用法があることを明らかにした。「話者の情報処理および言語表現処理状況の表出機能」には「語あるいは表現の検索」、「内容検索」、「ためらい」という用法があること、「シンタックスによって調整された談話構成機能」には「境界設定（話題転換、開始、終了、順序）」、「展開（対立、提示表現、説明、訂正、添加、結論）」という用法があること、「働きかけの機能」には「判断」、「質問／答え」、「確認」、「婉曲語法」という用法があることを示した。

第7章では、舌打ち音をフィラーと比較した結果、極めて類似的なものではあるが、舌打ち音は意思的には用いられない点、無声音であると同時に音素とは認められない点、語尾伸ばし並びにイントネーションの付加ができないという点において異なっていることを示した。

また、舌打ち音の特徴について再考察し、前後に境界の句切りとして無音のポーズを伴うことが多く、舌打ち音自身も音声的サインを伴う句切りという音韻的でも語彙的でもない分節の単位ではあるが、可能な解釈がある要素であることも明らかにした。さらに、言語学的な位置づけとして、語彙の周辺にあるものを「ペリレキシック」と命名し、身体的表現と言語表現との中間にあり、フィラーよりもさらに身体的表現寄りの要素、つまり、身体的表現の中で最も発声が大きいの、かつ言語的表現の中で最も発声がい小さいペリレキシック的要素であると結論づけた。

第8章では、調査Ⅷ～Ⅹの日本人フランス語学習者と舌打ちに関する3つの調査を行った。

調査Ⅷの学習者の渡仏前後の舌打ち認知調査では、フランス語母語話者の発する舌打ち音に気がついている人、全く気づいていない人が存在していることを確認した。前者と後者には動機づけ、学習歴、不安感の有無、フランス語運用能力の差、舌打ち音の認知にそれらが影響を及ぼしている可能性があり、それを検証するために調査Ⅸのフランス短期滞在者と長期滞在者を対象にしたアンケート調査を行った。その結果、フランス語母語話者の舌打ち音が気になり、それによって不安感を抱く傾向にある日本人フランス語学習者は、自己評価が低く、不安感がある、つまり、情意フィルターが高く、また外発的に動機づけられている傾向があることがわかった。

調査Ⅹでは、フランス長期在留邦人の談話における舌打ち音を調査した結果、フランス語や日本語にも、フランス語母語話者と同様に舌打ち音が現れるという事実を確認した。フランス社会への心理的な適応、同化に近い帰属意識、フランスで生きていくという決心と関係があるという可能性に言及した。

本研究での調査結果をふまえて、フランス語教育および日本語教育の現場においては、必要に応じて日本語の舌打ちとは異なるフランス語の舌打ち音の機能、用法などについて、学習者に伝えることが、日仏接触場面において有効であることを示した。

第9章は、それぞれの調査から得られた結果を統合し、記述する形で、冒頭で挙げたリサーチクエスションへの答えをまとめ、本研究の意義、談話における舌打ち音研究の今後の展開について述べた。

## 学位論文審査結果の要旨

本学位論文審査委員会は、本研究科言語文化学専攻の博士論文審査基準に照らして、厳正な審査を行い、以下の評価と結論にいたった。

### 1. この論文の意義

本論文は、フランス語の談話における舌打ち音の出現の言語学的基礎研究を中心として、さらに異文化間コミュニケーションに関する考察も含むものである。音声学的には吸着音として定義されるいわゆる舌打ち音は、日本語では苛立ちを表すしるしである。一方フランス語では、この音を指す日常語が存在しないことからわかるように、発話の際の単なる雑音として捉えられ、フランス語の母語話者・非母語話者を問わず、ほとんどの人には「聞こえていない」音である。このような事情もあり、この音のフランス語談話での生起は、今までの言語研究では全く注目されてこなかった。

本論文では、この音が単なる個人の癖や雑音ではなく、談話においてシステムティックに現れることを発見した。そして10の調査を行うことで、この音を多方面から記述し、その分布を観察した結果、フィラーとの類似性を指摘している。さらに大規模コーパス ESLO のデータを駆使して、談話の中での生起する環境を突き止め、吸着音のコミュニケーション機能に関する分析を行ったうえ、この音の生起をフィラーよりは身体表現に近い要素であると、位置づけている。最後に発展的研究として、日本人フランス語学習者の中には、この音を不快に感じる者もいる事実を元に、異文化間コミュニケーションに関する考察を行っている。

本論文は、以下の点でとりわけ意義がある。

第1に、独創的なテーマを扱っている。これまで誰も注目したことのない問題に取り組んでいる点で、極めてオリジナリティの高い研究である。

第2に、データが豊富で、質が高く、新規性がある。本研究で使われた ESLO は、フランス語圏を代表する話し言葉コーパスで、信頼性が高い。また近年一般公開されたばかりで、この資料を用いた研究成果はまだ多くなく、データとしても新規性がある。

第3に、分析が精密で、研究方法が適切である。本論文における研究手法は理論主導的というよりは、データ重視である。その目的のため、分析に着手する前提として膨大な第一次資料を自ら分析している。これは近年のいわゆるコーパス言語学が、しばしば出来合いの言語資源の分析に終始しているのと好対照をなす姿勢である。この作業は、フランス語という外国語で、しかも難易度の高い自発音声を対象に行われた。この困難な仕事に挑んだ努力は、高く評価されるべきである。コーパス言語学で最も労力を要するのが、データのアノテーションであることを考えるとき、この研究の卓越性が理解できる。

### 2. この論文の概要

この論文の本文の構成は以下の通りである。

序	
第1章	研究の対象・目的・方法
第2章	舌打ち音—先行研究およびフィラーとの関係
第3章	研究目的別調査
第4章	ESLO コーパスを用いた舌打ち音調査
第5章	コーパスにおける舌打ち音の出現と頻度
第6章	舌打ち音の用法と機能
第7章	フランス語話し言葉における舌打ち音とは?
第8章	日本人フランス語学習者と舌打ち音
第9章	結論

序においては、これまでまったく研究されてこなかったフランス語話し言葉における舌打ち音について、具体例を挙げつつ問題点を提示している。第1章では、研究対象を明確にした上で、研究目的・方法を述べ、第2章で先行研究を概観している。第3章から第6章で多方面から舌打ち音を詳細に記述、その機能を明らかにしている。第7章で、舌打ち音の生起環境をまとめたうえで、言語学的な位置づけを行っている。第8章は、それまでの言語学的研究の応用として、異文化間コミュニケーションの観点から舌打ち音を考察し、外国語教育への提言を行っている。第9章はこれまでの議論をまとめ、今後の展望について述べている。

この本文の後に、参考文献一覧、資料（データ表、データの英語訳、使用した調査書等）、事項索引があり、その後に、フランス語の要旨が続く。

全体の分量は352 ページで、日本語部分が292 ページ、フランス語部分が60 ページである。

### 3. この論文の評価

本論文の評価について、審査基準に基づいて以下に述べる。

#### 1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、以下の四点のリサーチクエスチョンに答える形で展開される。1) フランス語における舌打ち音の生起環境はどのようなものか。2) フランス語の舌打ち音は個人的な癖なのか、一般的なものなのか。3) フランス語の舌打ち音の用法、機能は何なのか。4) 舌打ち音の認知が人によって異なるのはなぜなのか。このように明快に問題点を同定した上で、論文の始めに提示し、結論部分でこれら4つに適確に答えている。この点から、研究テーマは十分に絞り込まれているといえる。

#### 2) 研究の方法論が明確である。

本研究では、対面調査、音声メディアでの観察、実験音声学的調査、インタビューといった様々な方法を用いて、多角的に舌打ち現象を探求している。その方法は調査ごとに明確に記述されている。多くのデータは、最近公開されたばかりのESLOコーパスを用いて、誰でも検証調査を行うことができるという点で、科学的な手続きが取られているといえる。

**3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。**

全く新しい研究対象であるだけに、先行研究は少ない。その中で、少しでも関係のありそうな文献を徹底的に調べて、参照している。さらに関連分野の先行研究も積極的に調査し、最終的な結論を導き出すことに貢献している。

**4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。**

文章は、論理的でわかりやすく明快である。引用されたフランス語には正確な日本語訳が添えられており、これによって、分析対象のフランス語データの内容について、細かいニュアンスまで読み込んでいることがわかる。吸着音の偶発的な生成の可能性について言及していないという細部における難点は見られるものの、全般的に極めて堅調な議論が展開されており、疑いのない学術的貢献があると言える。

**5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。**

フランス語学分野の先行研究で全く取り扱われてこなかった現象を研究対象としているという着眼点そのものが極めて独創的である。

#### **4. 審査委員会の結論**

本論文には、いままで殆ど注目されてこなかった現象を詳細に記述し、多くの実例に基づいた的確な分析がなされている。さらに、現象を形作るメカニズムを解明し、他の関連する現象と比較して的確に位置づけようとする意欲的な試みが見られる。とりわけそのテーマ設定における高い独創性は、他に例をみないものであり、高く評価できる。

以上から、本審査委員会は、全員一致で、この論文が3で記したように、本研究科博士論文審査基準をすべて満たし、博士の学位の取得にふさわしいものであると判断する。